

「寛容の心」に気づき、 ほんとうの親孝行ができそうです。

春日井教会 三上皓朗さん

三上さんは、45歳を過ぎても仕事上の人間関係で問題ばかり起こす自分に焦りを感じていた。そんな折り、ある人から「お父さんに感謝していますか?」と問いかげられた。「なぜ?」と思いながらも、自分の過去を振り返る。父親は、酒やギャンブル、女性におぼれ、家庭を顧みない人で、三上さんが10歳の時に両親は離婚している。以来35年間、父親とは会っていない。先の言葉は、仕事で短気を起こし、人とぶつかってしまうのは父親への怨嗟が要因であるという教えだったのだ。「そういうことがあるのか」と、不思議と心のモヤモヤが晴れた気がした。それから1年数ヶ月後、家族の手助けて父親との再会を果たす。木造の小さなアパートに一人で暮らす父親は、「お前たちを捨てた男だ。ほんとうにすまん」と深々と頭を下げた。その瞬間、長年の恨みが流れさり、どんな場合でも相手を理解して受け入れる「寛容の心」の大切さに気づかされた。「私の心を変えるきっかけづくりをしてくれた父に感謝しています」と語る三上さんの親孝行は、始まったばかりだ。



私心を去る

立正佼成会が行なっている三つの実践の一つに、人から呼ばれたらはずきりと「はい」の返事をするというのがあります。「一見、簡単なことのようにですが、「面倒だな」「あの人は苦手だ」といった私心があると、素直に返事ができないこともあるのです。逆に、呼ばれてすぐに「はい」と答えられるのは、私心がないときといえます。ところで、私たちの体は寒ければ熱が逃げるのを防ぎ、暑ければ汗をかくて体温を調節するなど、環境や条件におのずと順応します。心もまた、日々の出会いやできごとを選び好みせず、素直に受け入れて順応できればいいのですが、私心があるとそうはいきません。好いことだけでなく、つらく悲しいことでも、それを神仏の「おはからい」として感謝で受けとめることを大切にすれば、どのようなことも必然であり、むだなことは一つもないと知ることができます。そのとき私たちは善し悪しを離れ、現実を素直に受け入れられるのです。

立正佼成会